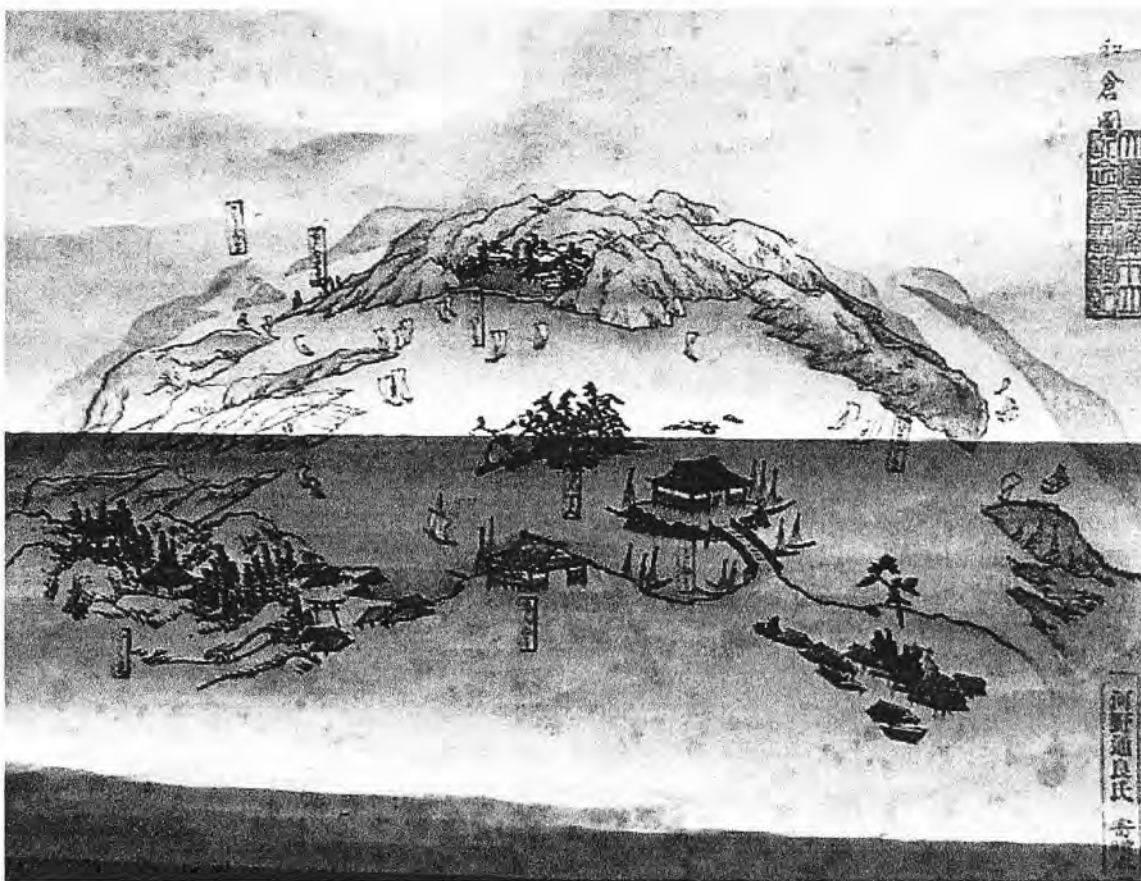


平成16年度 近世史料館秋季展

加賀・能登の温泉

平成16年10月5日(火)～同年12月26日(日)
近世史料館1階展示室



(和倉図 玉川図書館近世史料館所蔵)

玉川図書館近世史料館
電話 076-221-4750

秋季展「加賀・能登の温泉」

本展示は、江戸期より存在していた加賀と能登の温泉を紹介し、往時よりの温泉地の賑わいを絵図等から、湯治の様子を古文書等から温泉の制度や歴史を見ていこうとするものである。

江戸期の湯治は、病気や怪我の療養を主としたものだが、武士や町人という身分を越えて親しまれていた。また温泉は行楽の一つでもあり、例えば那谷寺への参詣では、粟津温泉や山代温泉が参詣後の楽しみとなっていたようである。また能登を代表する和倉温泉の湯は、金沢、富山、遠くは大坂まで運ばれるほどの人気があったとされている。

近世期の温泉史料に加えて、近代の古写真や観光パンフレットなども展示した。昔の温泉の姿を思い描く一助となれば幸いである。

展 示 品 解 説

【加賀の温泉】

かしゅうやまなかおんせんふうけい
加州山中温泉風景 木版1枚 69×95cm

安政5年(1858)金沢で作成された山中温泉全容を描いた木版画。湯宿の賑わいの中心に、湯けむりがあがっている建物が見える。右上部に「薬師」と記された医王寺も記されている。

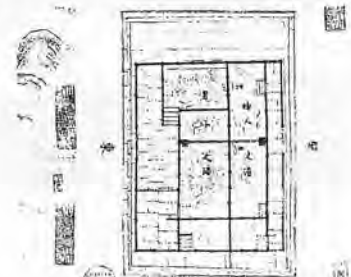
大友文庫 (大 1083)



かがやまなかおんせんのず
加賀山中温泉之図 卷子1 彩色 38×229cm

山中温泉を長家家臣河野通義(久太郎)が7枚の絵で描き巻物にしたもので、近世の温泉風景が写実的に実感できる彩色豊かな絵図である。氏家文庫に同画の写本がある。

河野文庫 (095. 33-34)



やまなかおんせんえんぎ やまなかおんせんとうじょうじょう
山中温泉縁起・山中温泉湯治養生巻 和本1冊 前田家編輯方写

「山中温泉縁起」は、文化9年(1812)、山中村の真言宗医王寺14代住職・良応の作で、行基が開いたとされる草創期の時代からの歴史を語り、「山中温泉湯治養生巻」は同人が翌年に記したもので入浴の作法などを記す。原本は、両方とも医王寺にある。

加越能文庫 (特 16. 93-35 「游記等七種」 所収)

やまなかにゅうとうどうちゅうおんしんしよじょう

山中入湯道中音信書状 切継紙 1点

長家の家臣杉野佐助から河野三郎左衛門宛の書状。9月6日金沢を發ち、山中には8日に到着している。入湯中に医王寺の参詣や、大聖寺へ墓参したことが記されている。大聖寺には河野家祖が慶長5年(1600)の大聖寺攻めで戦死し墓がある。

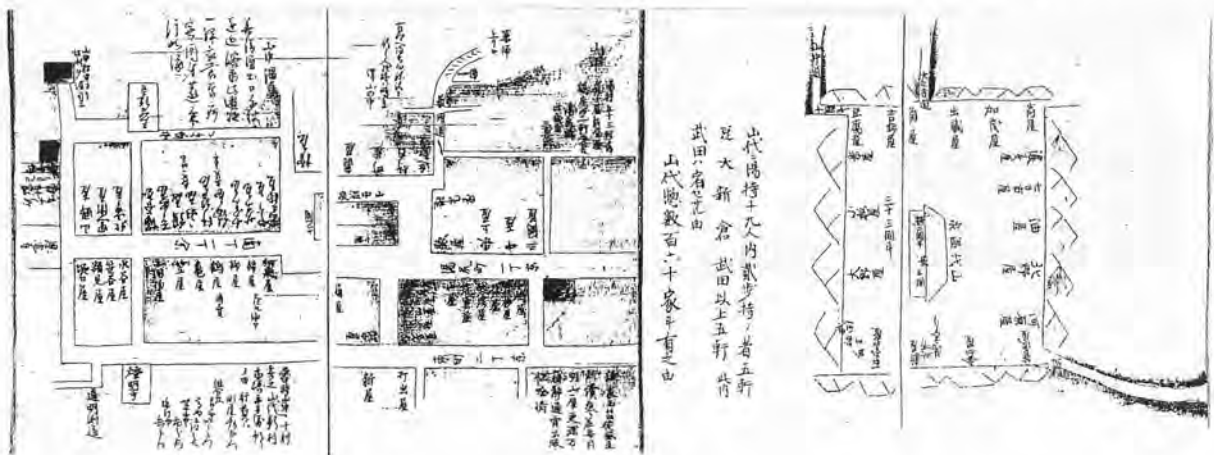
河野文庫 (095.16-10)

やまなかこうき

山中行記 冊子1 彩色 60丁

金沢から山中温泉までを、彩色図で解説した地図。途中の村名や個々の距離、眺望の良い箇所、分岐点での目印など、行程のガイドになる情報が記されている。途中の山代温泉の項には湯持ち19軒の場所などが示され、山中温泉では湯持ち53軒などの名前が図示されている。

加越能文庫 (特16.93-38)



かがなたあわづ

加賀那谷栗津名所全図

銅版画 1 40×56cm

明治30年に金沢で印刷された那谷寺と栗津温泉の鳥瞰図。那谷寺は西国三十三霊場の一つで奇岩の風景が人気の古刹であるが、栗津温泉に近いこともあり、参詣の宿となることが多かった。

藤本文庫 (096.0-279)

しばやまがたてんぼう

柴山瀉展望

卷子 1 41×301cm

昭和17年(1942)夏に北川金鱗(明治7年金沢生れ。山水画を得意とした画家。)が描いた柴山瀉湖畔の風景画で、正面に白山連峰、画面右端に片山津の集落が見える。この水墨画は作者から金沢市へ寄贈されたもの。

片山津温泉の源泉は柴山瀉の水中であったため、大聖寺藩主などが温泉の開発を進めたが、失敗に終わり、旅館が増えて繁栄を見るのは、明治中期に埋立が進んでからである。

郷土資料 (K7-25)

かがのくにやましろおんせんじよ

加賀国山代温泉所全図

銅版印刷 1枚 27×39cm

明治34年(1901)、金沢上堤町・山下本舗刊(みちしるべ4号)のもので裏面に汽車時刻表などが掲載されている。

富田文庫 (特23.2-68)

ありさわながさだねんぶ ふ ゆわくぎっぴつ
有沢永貞年譜 附湯涌雑筆

写本 1冊

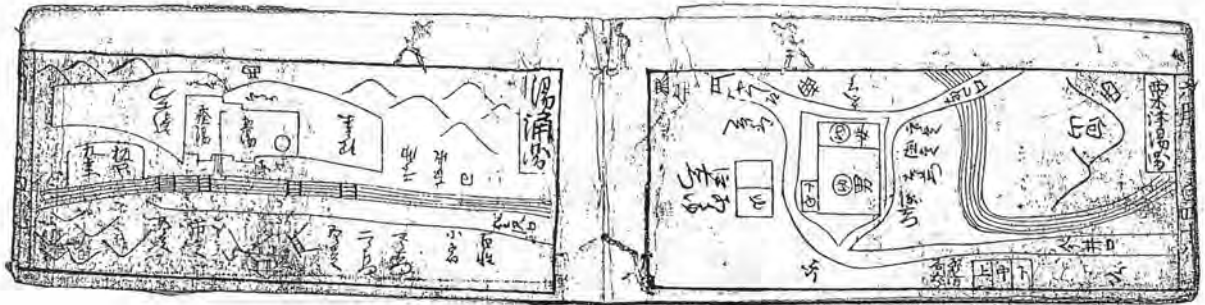
前田家編輯方写

有沢永貞は加賀藩の甲州流軍学者。息子・武貞と共に金沢湯涌温泉で、死去前年の正徳4年(1714)4月に7日間の湯治をした際の記録を残している。腰痛や中風の発作に苦しんだ人で、3週間の暇を取った上での湯治であったが1週間で切り上げている。加越能文庫 (特 16. 34-132)

ろくようしゅう

六用集 木版本 1冊 金沢 三ヶ屋五郎兵衛刊

正徳5年(1715)刊行。金沢の寺院付の他に加賀の温泉、山中・山代・粟津・湯涌の各湯図(温泉図)が掲載されている。村松文庫 (特 21. 0-14)



【能登と和倉温泉】

かえつのうさんしゅうさんせんきゅうせきし
加越能三州山川旧蹟志

和本 3冊

宝暦14年(1746)成立。各村の旧跡・社寺・山川・産物などを詳細に書いた記録で、和倉温泉については、始まりを寛永の湯役銀受領書があることから寛永年中(1624~1644年頃)としている。加越能文庫 (特 16. 84-22)

のうしゅうところぐち

おくごおりまでえんけい
能州所口ヨリ奥郡迄遠景之略絵図

彩色 1枚 40×82cm

所口から穴水・甲付近までの景観図。和倉村に「湯」と書かれている。湯は金沢や富山から大坂まで船で運ばれてもいた。嘉永7年(1854)和倉温泉の大坂での引札が、大坂に残っている(図説 七尾の歴史と文化 134頁参照)。加越能文庫 (特 16. 84-68)

ところぐち

わくら たづるはま
所口より和倉・田鶴浜に至るの図

卷子 1 彩色 24×173cm

文化13年(1816)冬、長家家臣・河野通義が作成の絵図「能州道中略図」の1点。温泉の源泉は陸から数十メートルの海上にあった。長さが20間(約36m)、30間(約54m)等の橋で結ばれ、源泉の場所は「湯サヤ」とあるが、湯を浴びる簡単な設備を整えていた。海水で温度を調節して浴するが、樽などで運び所口の旅館などでも浴した。河野文庫 (095. 33-4③)

わくらず
和倉図

木版彩色

卷子1

31×43cm

藩政期の和倉温泉。手前の建物を、右から順に「もとゆう(古湯)」「べんてん(弁天)」「しんゆう(新湯)」「やくし(薬師)」と表記し、奥の地名を、「びよぶざき(屏風崎)」「はんのうら(半浦)」「長じゃばな(長者ヶ鼻)」「さるじま(猿島)」と表示している。古湯(もとゆ)に対する新湯については陸地に新しい湯元が発見されたからとも考えられる。(田川捷一『和倉温泉のれきし』240頁参照) 河野文庫(095.33-33)



元禄六年 ^{わくら} 涌浦温泉役銀由来等 ^{やくぎんゆらい} (『温故集録』卷32 所収)

和倉(涌浦)温泉に関して、元禄期の^{とむら}十村中島村与一が記したものを、「温故集録」の編者・森田平次が考察している。 加越能文庫(特16.28-71)

^{のうしゅうかいがん} 能州海岸御巡見御道筋巨細書 ^{ごじゅんけんおんみちすじこさいしよ} 和本1冊

嘉永6年(1853)4月、13代藩主前田齐泰は、約700人を随行して能登半島を22日かけて一周し、海防視察を行った。和倉温泉で小休止をし、温泉の視察を行っている。有沢采女吉(師貞)による書類。 加越能文庫(特16.15-16)

^{わくらおんせんこう} 和倉温泉考 版本1冊

著者は田鶴浜出身で七尾町助役、石川県議會議員をつとめた三野昌平で、明治19年(1886)刊行。東大医学部卒の知識人であり、和倉温泉の起源や成分、効能などを記載した近代初期の代表的な文献。 津田文庫(098.0-42)

^{わくらおんせんうんとうろう} 和倉温泉雲濤楼之図 木版彩色1点 37×26cm

明治期の和倉温泉宿のチラス。温泉の泉質や飲料としての効能を記載している。 郷土資料(K2-863)



【温泉と文化】

かがやまなかおんせんよこう
加賀山中温泉余香

活版印刷 1冊

明治32年(1899)刊行。山中温泉について詠んだ俳句などを載せる。

稼堂文庫(091.0-58)

おくほそみち
奥の細道

木版本 1冊

松尾芭蕉「奥の細道」の初版本の復刻。元禄2年(1689)、俳人松尾芭蕉は、有名な「奥の細道」の旅の途中、加賀の山中温泉の宿に8日間逗留した。当時、湯量の豊富な山中温泉は全国的にも高名で、旅の疲れを癒す場として同行する河合曾良と逗留した。

「山中や 菊はたおらぬ 湯の匂」 長寿を象徴する菊を手折らなくても、山中の湯の香で生きながらた気分になったことを芭蕉は詠んでいる。 津田文庫(098.8-13)

かがのくにはくれいのず
加賀国白嶺之図

彩色写本 1点

45×69cm

安永2年(1773)、白雲齋可山写。白山信仰の図で、白山曼陀羅とも呼ばれる。温泉関係では、中央下端に「中宮村」とある。靈験あらたかな温泉の効能を信じる思いは白山への畏敬と無縁でないとも考えられ、参考展示した。 大友文庫(大1085)

ほっこくはくさんならびにおんせん のず
北国白山并温泉之図

木版画 1枚

39×54cm

明治期に(金沢石浦町)明精堂が木版で発行したもの。左下部の温泉は市ノ瀬温泉で昔は白山温泉(白山杉ノ湯)等と呼ばれ全国温泉番付で現在の石川県域では山中温泉と2つだけ載せられたことがある。 藤本文庫(096.0-288)

【その他 関連資料】

かえつのうず
加越能図

彩色 1枚 84×119cm

寛政元年(1789)作成。加越能三国が立体的に見える絵図である。山間部が緑豊かに、城下町は赤く表示されている。温泉では「和倉」「山中」「山城(山代)」が村の所在として記入されている。

後藤文庫(特19.9-174)



かがのとおんせん
加賀能登之温泉

写本 1冊 37丁 前田家編輯方編 25cm

和倉・深谷・山代・片山津温泉などに関して各種資料(明治期雑誌等を含む)を抜粋したもの。和倉・深谷温泉効能書も綴る。 加越能文庫(特16.70-24)

ぶしゅうえどより かしゅうかなざわにいたるなかせんでうさんせんえきろのず
従武州江戸至加州金沢中仙道山川駅路之図

折本 1帖 彩色 19cm

1里1寸の縮尺で書かれ、江戸と金沢の間の駅路を示すもので、山代湯、山中湯の主要な経路もわかる。 加越能文庫(特16.78-45)